

小学校だより

Vol.130



「教えるとは夢を語ること」

椋山女学園大学附属小学校長 河野 庸介

毎週月曜日に行われる全校朝礼で、二〇一四年のノーベル平和賞受賞者 マララ・ユスフザイさんの言葉を児童に紹介した。

One child, one teacher, one book and one pen can change the world. Education is the only solution. Education first.(一人の子供、一人の教師、一冊の本そして一本のペン、それで世界を変えることができます。教育こそがただ一つの解決策です。教育を第一に。)

子供たちにはより分かりやすくするために、「Education」の部分は「皆さんにとっては毎日学校で学習することです」と解釈して伝えた。「友達がいて、椋山小学校の先生方がいらっしやうって、きれいな教科書があり、そして筆箱の中に鉛筆のある皆さんは、この椋山小学校で毎日学習することで、世界を変えることができるのです」と話した。椋山小学校の子供たちに、日々学習することが自分を成長させ、やがては名古屋を、愛知を、日本を、そして世界を変える力になるのだと気付いて欲しかったのである。

五分前後の朝礼時の講話であり、ほぼこのような内容で終わったのであるが、マララさんは、「Education is the only solution. Education first」と訴えているのである。彼女の訴えは子供たちを「Educate」すべき、その機会を保障すべき私たち大人に

向けられている。

はたして、今日の社会が直面する様々な課題に対して、「教育こそがただ一つの解決策」であるとの強い思いをもって私たち教師は子供たちに向き合っているであろうか。マララさんは「私たちの未来はまさに教室の中にあつた」と振り返りもしている。マララさんの言葉どおり、椋小の子供たちの未来はこの椋山小学校の教室の中で形作られているのだ。そのような重要な営みである学校教育の最前線としての教室。教育する者として教室に向かう私たち教員は、「教育を第一に」というマララさんの訴えを誰よりも重く受け止める必要がある。そのような自覚と責任感を椋山小学校の全教職員で共有したいと思う。

マララさんのスピーチが忘れられない理由がもう一つある。それは、「すべての子供たちが学校にいるのを見届けるまで私は戦い続けます」という、十七歳のマララさんが自らの命をかけてまで実現をめざす「夢」への強い思いである。かつてフランスのある哲学者は「教えるとは夢を語ること」との言葉を残した。教える者としての私たち教員。その私たち一人一人が、子供たちに語るべきどのような夢を自らの胸の中にかかせる強さを持っているのか。マララさんでなくとも、かつて敗戦後の日本の教員たちは、黒々と塗りつぶされた教科書を片手

に、「平和な国家日本を創るのだ」という熱い夢をもって教壇に立ったはずである。その強い思いが見事に実り、平和な国家日本として戦後七十年の平和と繁栄が実現したのだと思う。

翻って今日、「人間になる」という教育理念を掲げる椋山女学園大学附属小学校として、改めてその理念の実現に全力を注がなくてはならない。日々の教育活動を通して、「人を大切にできる人間」として互いを認め合い、尊重することのできる児童を育てなくてはならない。「人と支え合える人間」として互いに力を合わせて行動することで相互に成長していくことのできる児童を育てなくてはならない。「自ら頑張れる人間」として課題の解決に向けて主体的に取り組むことのできる児童を育てなくてはならない。そしてこれら三つの具体的な人間像に本校児童をより近づけていくためには、「確かな学力」としての「知識・理解」や、「思考力・判断力・表現力」を子供たちに育成すること、さらに様々な学校行事を通して子供たちに「豊かな人間性」を身につけさせることが求められている。そのために椋山小学校の全教職員が全力を尽くさなくてはいけないのだと、改めて私たち教職員にその覚悟を問いかけるマララさんの言葉である。

特集 自校史教育 P2

委員会・部活動報告 P4 / 学期の記事 P5

学年トピックス P6~P17

PTA P18 / 職員の諸活動・学園トピックス P20

CONTENTS